

# もっと女性に活躍の場を、そして外国人の力も

—2020 東京オリンピック・パラリンピック招致最終プレゼンを視聴して—

2013 年 9 月

高山 憲之

## 1. はじめに

ブエノスアイレスで開催された IOC 総会でチーム日本の最終プレゼンテーションが 2013 年 9 月 7 日に行われ、2020 年東京オリンピック・パラリンピック招致が 9 月 8 日早朝（日本時間）に決定した。

招致の決め手となったチーム日本の最終プレゼンには、従来の通念をくつがえす 2 つの内容があった。それは、女性を前面に押し出したこと、および外国人コンサルタントを上手に活用したことである。

日本人男性は一般に恥ずかしがり屋が多く、控えめな人が少なくない。そつのない内容がプレゼンに盛り込まれていても、伝え方が下手なためなのか、強烈な印象というものほとんど残らない。これが、日本人男性のプレゼンに対する外国人の一般的な見方であった（無論、小泉元首相のような例外もある）。

ところが、今回のプレゼンはインパクトが強く感動的でした。それには多くの要因があったはずであるものの、私個人としては上記 2 つの勝因を改めて指摘しておきたい。私は単なるテレビ視聴者にすぎないが、以下、個人的所感を書きとめておく。

## 2. 女性を前面に

日本チームは今回、女性を前面に押し出した。高円宮妃久子さま、佐藤真海さん、そして滝川クリステルさんである。

まず、高円宮妃久子さまは皇室の政治不介入という原則に配慮し、オリンピック招致に関して一切発言しなかった。日本国民を代表して、震災復興支援に対し、心からの感謝の気持ちを伝え、「ツバサ・プロジェクト」に触れながらオリンピズムの哲学を実践し、成功を続けている IOC を賞賛した。短時間の中で、内容豊かなスピーチを凛として気高く、しかも端正な姿でなされたのである。このような妃殿下が皇室のメンバーであることを私は日本人の 1 人として誇りに思った。

次に登壇したのは佐藤真海選手。つらい記憶を笑顔で包み、情感あふれるスピーチでスポーツのもつ偉大な力を語った。とくに“bring people together”というメッセージが素晴らしく、彼女はまさにオリンピック招致の女神となったと讃えられている。

3 人目の女性は滝川クリステルさん（母親が日本人）。見返りを期待せずに動くという日本人の美質「オ・モ・テ・ナ・シの精神」を絶妙なジェスチャーを交えながら具体的かつ、たおやかに語った。秀逸なプレゼンだった。

上記 3 人のプレゼンは、いずれも従来の日本男性には無かったものであり、インパクト

は圧倒的であったと思う。無論、男性陣もそれなりのプレゼンをした。なかでも竹田招致委員会理事長の必死の思いは私個人の心にストレートに届いた。

### 3. 外国人コンサルタント

4年前にも外国人コンサルタントとアドバイザー契約していたようだが、今回のプレゼンにおいて外国人コンサルタント、ニック・バレー氏（イギリス出身の元ガーディアン記者）の功績はきわめて大きかったと言われている。身振り手振り、表情、声のトーンと緩急の利いた話しぶり、息づかい、抑揚など、氏の演出でチーム日本のプレゼンは新軌軸となった感が強い。日本人は謙遜を大切にする。しかし、その謙遜が今回のプレゼンにはなかった。外国人アドバイザーの徹底した演出がなければ、そのようにはならなかつたろう。その演出で伝え方が一変し、聞き手の心を強く引きつけたのである。

### 4. 結び

元来、日本女性の潜在能力はきわめて高かった。ただ、その能力を發揮する表舞台を彼女たちに用意することに対して、日本男性は、これまで総じて消極的であったと思う。様相は一昔前と少しずつ変わりつつあるとは言え、チャンスに恵まれない日本女性が今も少なくない。さらに、有能な外国人の力を借りるという点においても、日本は今、端緒にいたばかりである。

日本女性に活躍の場をもっと多く提供し、その潜在的能力の高さを存分に發揮してもらおう。有能な外国人にも日本で活躍するチャンスをもっと与え、われわれの弱点を補ってもらおう。日本で勝負してみたいという有能な外国人が次から次へと現われる。

この2つが実現すれば、日本の将来は今とは随分と違った姿になるだろう。悲觀的になる前に、まず、やるべきことをやってみようではないか。